

原 著

医療事故防止教育の効果 —シミュレーション後の学生の心理的影響について—

佐渡看護専門学校；看護師

鈴木智恵美、加藤由美子

目的・方法：平成17年度3年次夏期休業前に実施した事故防止教育において、事故体験が得られるようなシミュレーションを実施し、学生の心理面への影響と、学生の事故防止に対する意識が高まったかの評価を目的に、アンケート調査及び学生のシミュレーション後の記録の分析を行った。

成績：医療事故シミュレーション体験によって、学生はそれぞれに心的衝撃を受けたが、種々のリフレクションの場を通して、感情表出、共感、プラス思考の思考過程から学習意欲を得ている。

結論：今後はさらにリフレクションを通して、学生が問題解決に向けて具体的行動を意識化できるかわかりが必要である。

キーワード：看護学生、事故防止教育、心理的影響

技術、タイムプレッシャー、作業中断等を織り込んだ与薬演習及び2名の患者対応での転倒事故演習を行った。直後にリフレクション（振り返りの記録、教員との面接、翌日グループワーク等）を実施した。夏期休業後（1ヶ月後）にアンケート調査（多肢選択法と自由記述法を併用した質問紙）を実施し、調査結果と学生の振り返りの記録を分析した。

調査時期：2004年7月～9月

倫理的配慮：調査書に調査目的を記し、記載内容と成績は関係ないことを説明し、無記名で協力を依頼した。

結 果

アンケート回収率は100%であった。

1. 医療事故防止教育におけるシミュレーションの効果について

「事故防止教育を受けて、事故防止に対する意識が強くなった」と回答した学生は33名（100%）であった。実施内容のなかで、特に事故防止に対する意識が強くなったと思う内容は、シミュレーションが24名（77%）で、事故事例・事故防止のVTRが3名（10%）であった。（図1参照）

「シミュレーションからヒヤリ・ハットや事故につながる体験ができた」と回答した学生は33名（100%）であった。シミュレーション直後の気持ちについて、「恐怖感」15名（48%）、「ショック」7名（23%）、「何も考えられない」が7名（23%）で同数であった。その他の記述内容は、「危険な職業である看護の道を選択したのは誤りだったのでは」や、「教員に対して怒りを感じた」「悔しい」があった（図2参照）。そのような気持ちにつながった内容としては、与薬シミュレーションが25名（78%）、転倒シミュレーション7名（22%）であった。与薬シミュレーションをあげた理由の記述内容は、「頭の中が真っ白になった・パニックになった」11名、「事故を起こしてしまう（人を殺してしまう）恐怖感」6名、「なにもできない・わからないという無力感」が4名等であった。転倒シミュレーションをあげた理由の記述内容は「自分の不注意（判断の誤り）で事故につながる」4名、「今後も（実習や臨床）でありうることと感じ、ショックだった。」4名、「恐怖感」4名、「予測できないところで転倒し、自信をなくした」が3名であった。

結 言

多発する医療事故が目されるなか、看護基礎教育においても医療事故防止教育の重要性が叫ばれている。佐渡看護専門学校でも事故防止への動機づけや安全を意識した技術力修得に向けて教育方法の検討を重ねている。平成17年度は事故防止についての基礎的知識の講義を追加し、事故事例と事故防止方法についてのVTRの活用、与薬及び転倒シミュレーション体験、事故原因及び予防についてのグループワーク等を実施した。

事故防止には、「人は誰でも間違いをおかす存在である。」という認識をもち、安全に関する基礎的知識と注意力を高めることが必要である。なかでも医療事故のシミュレーションは、事故体験が得られることから事故防止に対する意識づけへの効果が大きいと考えられる。事故防止教育におけるシミュレーション体験により事故防止への意識づけができたか、またどのように学習及び実習意欲への動機につながったかの評価を学生の心理面に焦点をあて調査・分析を行った。

対 象 と 方 法

対象者：3年課程3年生 33名

方法：夏期休業前7月に事故防止教育の講義、事故体験が得られるようなシミュレーション（類似性のある2名の患者対応、輸液ポンプ、静脈注射

与薬シミュレーションで事故を起こしたと感じた場面の記述内容は、処方箋の読み間違い、エア混入、静脈注射の急速投与、滴下計算間違い、三方活栓の使用間違い等であった(表1参照)。学生が自覚した事故要因の記述内容は、知識不足、確認不足、タイムプレッシャー、技術不足等であった(表2参照)。

2. シミュレーション後の心理変化の要因について

「事故防止教育終了後1ヶ月現在、事故防止の意識が高まり意欲・やる気につながった」に「はい」と回答した学生は25名(76%)、「いいえ」は6名(18%)、「どちらともいえない」は2名(6%)であった。意欲・やる気につながった内容の順を問うと、リフレクション「教員との面接」、「まとめのグループワーク」、「全体での感想の発表」、「時間の経過と休養」それぞれが5名(19%)で同数であり、次に「学生同士での体験の会話」が4名(15%)「振り返りの記録」は0であった(図3参照)。

理由の記述内容は、リフレクション「教員との面接」では、「聞いてもらい、話すことで冷静さを取り戻した」3名、「状況を説明していると自分の不足部分が見えてきた」2名、等であった。[まとめのグループワーク]からは「事故の要因、今後の改善点が変わり意欲・やる気ができた」4名、「自分が体験できないことをメンバーから学べた」4名、「皆が同じ気持ちだとわかった」2名等であった。[全体を通しての感想の発表]からは「皆が同じように感じていたことがわかった」5名、「皆で前向きに、今後に活かし頑張ると話した」5名、「事故は誰にでも起こりうる。皆で注意していかなければ」3名等であった。[時間の経過・休養]からは、「落ち着いて振り返ることができた」3名、「休んで考えてみたら頑張ろうと思えてきた」2名等であった。[学生間での体験の会話]では「皆が同じ体験をしていると安心した」9名、「今後の改善点を学び励まされた」3名、「前向きな感想を聞き、一緒に頑張らなければと思った」3名等であった。

考 察

1. 医療事故防止教育におけるシミュレーションの心理的效果について

事故防止への意識は、実際のヒヤリ・ハットや事故体験によって事の重大性に気がつき、予防意識や行動変容に影響を及ぼすことが大きい。今回のアンケート結果より、シミュレーション体験は現実の事故体験でないにもかかわらず学生の心理的動揺が大きく、直後は現実感のある事故体験ができたことがわかった。転倒シミュレーションよりも与薬シミュレーションの方が心理的影響が大きかった結果から、与薬が生命に直結する技術であることを講義やVTRにより認識できたためと考える。シミュレーション体験により、学生は予想外に自己の技術の未熟さに気がつき、驚き、ショックや恐怖感をいだいた。「自分は事故を起こす存在である」という認識に直面し、ショックから無力感やなかには看護の道を選択したことを後悔したり、教員に怒りの感情を表現した学生もいた。このようなことは、事故体験からの心的衝撃による防衛機制の心理過程とも考え

られる。畑村は「失敗した瞬間、痛い、辛い、悔しいという気持ちが心に生じたならば失敗の体験は強くその人の中に根付く。それは、その人の中に新たな知識を受け入れる素地ができたということである。」と述べている⁽¹⁾。失敗体験により現実的に自己の知識不足や技術の未熟さに気がつき、知識・技術の修得の必要性を痛感できた。それを意欲的に自己の課題に取り組む姿勢に変えることができこそ行動変容につながる可能性がある。

2. シミュレーション後の心理変化の要因について

失敗体験は無力感につながり、自己効力感の低下をもたらす。清水は「パワーレスな状態にある人々が再びパワーをもち回復する過程がある。そのプロセスは、傾聴、対話、行動の3段階を踏み成長するプロセスの特徴をもつ。」と述べている⁽²⁾。シミュレーション後の学生の行動にあてはめると、教員が面接による傾聴、支持を行っている。学生同士では、互いに自己の失敗体験や心理状態を語り合い、対話から連帯感、仲間意識の高揚を体験し、感情表出や不安の緩和が得られている。まとめのグループワークでは、問題点の共有化、問題の原因分析、問題解決に向けて検討し、今後の自己の改善点が見えてきたことからやる気につながっている。さらにシミュレーションからの心理的衝撃を癒すには、夏期休業期間の時間の経過も有効であった。

アンケート結果からわかるように、振り返りの記録は体験の意味づけが薄かったと思われる。岩本は「失敗の体験は負の体験であり、経験させることを避ける傾向がある。しかし負の体験は創造的側面を含み、意味あるものとして捉えるならば、そこには多くの学びが存在する。」と述べている⁽³⁾。今後の課題としては、失敗体験が意味あるものとして捉えられるような意識づけが必要である。シミュレーション後の振り返りの記録を活用し、自己の変化に意識を向け、失敗体験がどのような意味があったかを問いかけ明確化することで、新たなプラス面での自己の発見につなげていくことが有効であると考え

結 語

1. シミュレーションの効果は、「自分も事故を起こす存在である」という認識がもてるとともに、直後の心的衝撃は大きく、意欲低下をまねく可能性が大きい。
2. 心的衝撃をうけた学生は個々にそれぞれの対処方法をとっている。種々のリフレクションの場を通して同一体験からの感情表出と共感を得て、プラス思考の思考過程から学習意欲へと変わっていくことができる。
3. リフレクションを通して個々の学生が問題解決にむけて具体的行動を意識化できるようなかかわりが大切である。

文 献

1. 畑村 洋太郎. 失敗学のすすめ. 東京: 講談社. 2000; 127.

2. 清水準一. ヘルスプロモーションにおけるエンパワメントの概念と実践. 看護研究1997; 30(6): 9-14.
3. 岩本郁子. 看護・医療事故のシミュレーションによる学びの構造. 東京: 厚生労働省看護研修センター, 2002; 10-13.
4. 丸山美知子. 看護・医療における事故防止のための教育方法の開発に関する研究. 東京: 厚生労働省看護研修センター, 2002.
5. 氏家幸子. A成人看護学原論. 東京: 廣川書店, 2002.
6. 安梅勲江. エンパワメントのケア科学. 東京: 医歯薬出版, 2004.
7. 土屋八千代. 看護事故を予防する. 東京: 医歯薬出版, 2003.

英文抄録

Original article

An evaluation of a preventive education against medical accidents -a psychological influence on students after the educational simulation-

Objective and Study design: Before summer vacation in 2005 we provided the preventive simulation against medical accidents to our 3rd graders. Questionary survey was performed to evaluate both a psychological influence and an improvement of preventive awareness.

Results: The students received a mental shock by the simulation study. They got a learning will through an expressiveness of emotion, sympathy, and a positive thought.

Conclusion: They are expected to concrete their consciousness to solve the present problems on further reflection in the future.

Key words: nursing student, preventive education against medical accidents, psychological influence

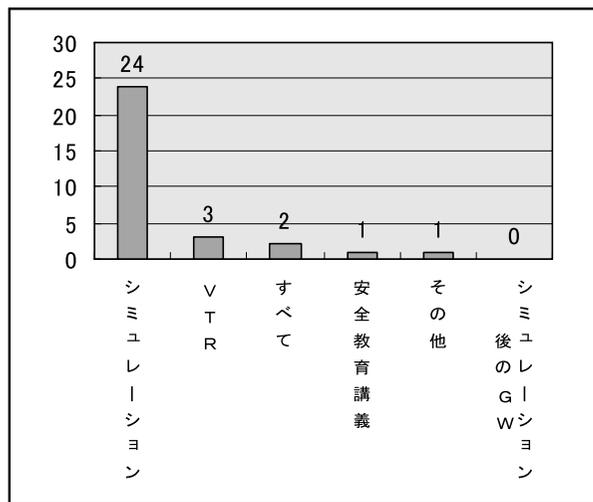


図1 事故防止の意識が高まった授業形態

表1 ヒヤリハット・事故場面

事故を起こしたと思った場面	人数
処方箋の意味がわからない	19
エア-混入	13
静脈注射の急速投与	10
輸液ポンプの操作間違い	9
滴下計算間違い	8
輸液速度の確認をしなかった	8
三方活栓の使用法間違い	7
その他	23
合計	97

表2 事故要因

なぜ事故を起こしたか	人数
知識不足	32
確認不足	17
タイムプレッシャー	15
技術不足	10
思いこみ	6
その他	18
合計	98

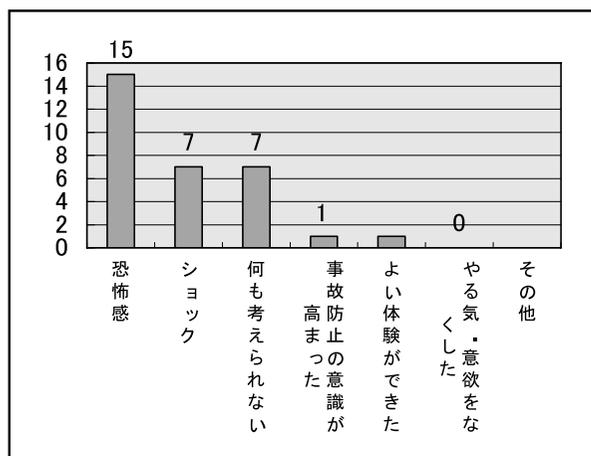


図2 シミュレーション直後の心理状態

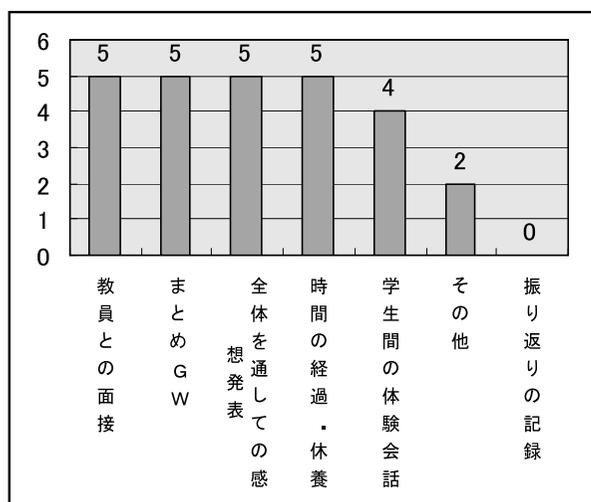


図3 やる気・意欲につながった要因